

## ランチョンセミナー13

### 出血性疾患の診断とケア ～血液検査の関わりとその詳細～

天野 景裕<sup>1</sup>, 井上まどか<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東京医科大学病院 臨床検査医学科

<sup>2</sup>群馬大学医学部附属病院 検査部

出血性疾患を診断する際の道筋（チェックポイント）は以下のとおりである。1.重要な患者情報の確認 2.臨床症状の確認 3.異常な検査結果の確認 4.鑑別診断の確認 5.追加検査による絞込み 1. 患者情報の確認以下のことを詳細に確認する。既往歴：肝・腎疾患の有無？出血傾向を疑う症状の確認、先行感染の有無？家族歴：遺伝性が疑えるか？服薬歴：出血傾向に関連する薬剤投与歴はないか？ 2. 臨床症状の確認 出現時期は幼少時からあったのか？なかったのか？出血部位とその性状は表在出血か？深部出血か？などを確認する。3.4.5. 止血機能検査結果の確認 止血機構のどこ（血管？血小板？凝固？線溶？）に問題があるのかを出血時間、PT、APTT、フィブリノゲン、FDP（Dダイマー）などのスクリーニング検査で確認していく。そして、鑑別診断の確認を行い追加検査による精密検査で絞込みを行っていく。本ランチョンセミナーでは、医師の天野が症例を提示しながら、上記の診断の道筋を聴講の皆さんとともに進めていき、その患者さんの診断やケアに必要な血液検査項目の詳細と注意点についてを臨床検査技師の井上が解説していきます。